

る人々がどこまで生物学的だけではなく社会的に生きる世界を自前で構築できているのかという点においては記述が不十分であるように思われる。スクウォッター研究の観点からいえば、これまでの生物学的に生きるための不法占拠が明らかにされてきた事例[e.g. チャタジー 2015; 上田 2010]とあまり相違がない。確かに歩道寺院の一般的な信仰の記述から宗教的側面がみられるものの、彼らが社会的に生きる世界を自前で構築していく実態としての不法占拠[e.g. 北嶋 2022]については十分に記述されていないと指摘できるだろう。これほど多様な事例に基づいて展開された広義の「ストリート」であるからこそ、編者が着想を得ることができた狭義のストリートあるいはスクウォッター研究などへと再び還元されることを期待したい。

以上、評者の感じた細かな点を挙げたが、本書は編者による極めて根源的かつ示唆的な人類学理論の展開に加えて、各論者による多彩な事例とアジア・アフリカ地域の枠を越えた壮大な地域横断研究としても位置づけられるものである。研究対象や地域を問わず人類学や地域研究を学ぶ全ての人の手に渡ってほしい一冊である。

#### 引用文献

- 上田 達. 2010. 「居座る集落, 腰掛ける人々—マレーシアの都市集落の事例より」『文化人類学』75(2): 216–237.
- 北嶋泰周. 2022. 「フィールドワーク便り かけがえない居場所—サードプレイスとしての闇市」『アジア・アフリカ地域研究』21(2): 308–313.
- 関根康正. 1995. 『ケガレの人類学—南インド・

ハリジャンの生活世界』東京大学出版会.

チャタジー, パルタ. 2015. 『統治される人びとのデモクラシー—サバルタンによる民衆政治についての省察』田辺明生・新部亨子訳, 世界思想社.

小林和夫. 『奴隷貿易をこえて—西アフリカ・インド綿布・世界経済』名古屋大学出版会, 2021年, 326p.

中尾世治\*

本書は、18世紀から19世紀半ばまでの西アフリカで取引されたインド綿布を中心に、西アフリカの消費者、南アジアの生産者（織工）、イギリスとフランスの仲介者（商人）という3者の連関の形成を描いている。18世紀から19世紀半ばは、イギリスで産業革命が生じた一方、西アフリカ内陸では大規模なジハード運動（イスラーム国家建設運動）が生じ、沿岸部では大西洋奴隷貿易から「合法的」貿易（奴隷以外の換金作物貿易）への転換が生じた時代であった。この時代の経済史は、かつての従属論や世界システム論では、世界経済の「中心」と「周辺」の形成として論じられてきた。しかし、そのような議論は、「『犠牲者』としてのアフリカ像」の提示に終始し、「アフリカ大陸に住む人々のエージェンシー（行為主体性）」を軽視してきた（pp. 10–13）。そこで、本書では、グローバル・ヒストリー研究を踏まえて、グローバルな局面での相互依存関係の成立と統合として、西アフリカと南アジアの連関を、

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

西アフリカの消費者というエージェンシーに着目して示すことになる。こうした立場が序論で示され、以下、第1章から第4章、終章の5つの章が続く。

第1章では、イギリスとフランスの貿易統計を用いて、18世紀から19世紀半ばまでの西アフリカの輸出入を同時代の政治状況とともに概観している。そこではまず、大西洋奴隷貿易が1787年のピーク後に衰退し、「合法的」貿易に移行したことが確認される。

「合法的」貿易時代の主要な輸出品は、工業化したヨーロッパで急激に需要を高めた、パームオイル、アラビアゴム、落花生であった。こうした需要の増大に対応して、パームオイルとアラビアゴムの生産のために、急激に衰退した大西洋奴隷貿易に向けられた奴隷が内地での労働力へと転換され、落花生生産では季節労働者が内在的に出現した。

輸入品では、18世紀から継続して、繊維製品が大きな地位を占めていた。19世紀になると、イギリス製の綿布も安価な布として流入するようになるが、依然として、インド製の綿布の需要が高く、その大半は染物であった。特に、フランスからセネガルに輸入されたギネ（インド製の藍染綿布）は、19世紀前半のセネガルの最大の輸入品であった。

モルディヴ産の寶貝はサハラ越え交易によって、すでに西アフリカにもたらされていたが、18世紀に興隆した大西洋奴隷貿易とともに、沿岸部からも輸入されるようになった。モルディヴ産寶貝は、イギリスの奴隷貿易の廃止後10年間は激減したものの、19世紀前半に急増していった。

まとめると、西アフリカからの輸出ではヨーロッパの需要に対応したアフリカ側の柔軟な反応があり、輸入では、安価であるが質の悪いイギリス製綿布よりもインド製綿布が好まれ、モルディヴ産寶貝の需要が高く、それらが英仏を介して輸入された。つまり、このように「合法的」貿易時代には、輸出入品を介して、ヨーロッパと西アフリカと南アジアの連関を見出すことができる。

第2章では、19世紀前半におけるセネガルのギネの輸入に焦点が絞られる。ギネは染料のインディゴによって日差しなどからの保護の効果があり、身体と布の間の換気に有用であり、それがゆえにセネガルで好まれたという。他方で、ヨーロッパ製の模造品はインド製の藍染による匂いまでは模造できず、セネガルの消費者に好まれなかった。さらに、藍染綿布の着用は富の象徴としての顕示的消費のひとつであった。これらがギネの強い需要を生じさせたとする。

ギネの輸入は、多くの仲介商人のネットワークによって可能となっていた。南インドの仏領ボンディシェリでつくられたギネは、フランス商人によって一度、フランスに送られた後、セネガルへと再輸出された。サンルイに運ばれたギネは、仲介商人に信用貸しされ、仲介商人はそれに見合ったアラビアゴムを、セネガル川下流域の住民から仕入れていた。また、ギネは貨幣としても用いられていた。西アフリカではギネの到来以前から綿布の生産がなされ、布を貨幣として用いる慣行が存在していた。ところが、17世紀から19世紀半ばにかけてセネガル川下流域では乾

燥化が生じ、ワタの栽培が困難になり、安定的に輸入されるギネが西アフリカで生産される綿布にかわった新たな布貨となりえたとする。

第 3 章では、舞台はインドに転じ、西アフリカ向けのインド綿布の生産と、ヨーロッパによるインド綿布の調達・確保が論じられる。18 世紀後半、イギリスや海外市場向けの各種綿布の需要は、イギリス東インド会社を通じてインドに伝えられていた。しかし、自然災害や政治経済的な要因によって、商品調達は不安定なものであった。そこで、18 世紀後半から東インド会社は、インド人仲介者を排除して、織工を直接管理しようとした。しかし、織工にインセンティブを適切に与えられず、イギリスの綿工業の発展とインド綿布のイギリスへの輸入阻止などのロビー活動もあって、東インド会社は南インドに投資を十分におこなうことができなかった。他方でフランスは、19 世紀初頭、ボンディシェリの返還後に、公営の作業場の建設、民間企業家による繊維産業への投資の奨励、蒸気機関を備えた紡績機の導入をおこない、ボンディシェリの綿布生産を飛躍的に増加させた。ギネの輸入の急増は、こうしたヨーロッパでの政治経済的な変動と結びついていたインドでの供給側の状況とも関連していたとされる。

第 4 章では、18 世紀から 19 世紀前半にかけての西アフリカへのインド製綿布の輸送を支えた英仏の商人をとりあげている。1813 年までは、イギリス東インド会社がインド貿易を独占しており、家族経営の奴隷商

人たちがインド綿布を東インド会社から仕入れ、別の奴隷商人たちに供給することで西アフリカへと輸出していた。奴隷貿易廃止後、一部の奴隷商人たちは「合法的」貿易へと転換し、東インド会社の独占が廃止された 1813 年以降はさまざまな商人がインド製綿布の貿易に参入した。しかし、イギリス繊維産業の工業化とそれに伴うロビー活動によって、イギリス全体のインド製綿布の輸入量は低下し、西アフリカへのインド製綿布の輸出も低下していった。

他方で、19 世紀前半、フランスからセネガルへのギネの輸出は増加していた。このフランスの西アフリカ貿易を担ったのが、イギリスと同様に家族経営によるボルドーとマルセイユの商人たちであった。特にボルドーの商人は、マルセイユの商人を排除するための特権組合をフランス国内でのロビー活動を通じてつくりあげ、仲介者を排して、直接的にアラビアゴムを仕入れることで、セネガル川下流域を中心としたゴム貿易とギネの輸送によって主導的な地位を確立するにいたった。

終章では、以上の論述を経済史研究のより広い文脈に位置づけなおしている。まず、19 世紀の熱帯地域における経済発展の研究を引きつつ、パームオイルや落花生などの外部からの一次産品需要とそれに伴う所得獲得の機会に西アフリカの生産者が主体的に反応したことで、19 世紀の西アフリカは貿易主導の経済成長をとげたとする。

つぎに、これまでの帝国史とグローバル・ヒストリー研究が、「周辺」の利害関係が地理的に離れた社会に与えた影響に無関心で

あったという先行研究の指摘を確認する。この点で、セネガルにおけるギネの強い需要がボンディシェリの繊維産業の発展を導いたとし、これが「工業化の時代における非ヨーロッパ製品のグローバルな生存」(p. 249)という今後の研究アジェンダにつながるとする。そして、最後に、多元的グローバル化として、西アフリカと南アジアの連関がギネと宝貝に見出すことができるとしている。

本書の最大の貢献は、インド製綿布の貿易に関連する一次資料を用いて、イギリスとフランスの商人を媒介とした西アフリカと南アジアの連関を明らかにしたという点にある。西アフリカ沿岸部で奴隷、あるいはパームオイルやアラビアゴムなどの入手のために、西アフリカで需要の高かったインド製綿布を輸出する必要があったこと、特に西アフリカの消費者が綿布の品質に大きな関心をもっていたことを明らかにしたことは、西アフリカの消費者のエージェンシーを明解に示している。

また、本書は西アフリカの「合法的」貿易についての概観とともに、脚注に最新の研究を含む膨大な先行研究を明示しており、異分野の研究者や初学者にとって、この分野の研究の現状を知るための基盤を提供している。

もちろん、本書にもいくつかの問題点は指摘できる。たとえば、第1章で同時代の西アフリカのジハード運動をまとめているが、ソコト・カリフ国による沿岸後背地への奴隷の供給という点以外は論旨にはほとんど関連していない。また、肝心の西アフリカの消費者がどのような人々であったのかは具体的に述べられておらず、ギネの選好の理由も日差

しからの保護や顕示的消費などの一般論にとどまっている。西アフリカの人々のエージェンシーは、西アフリカの諸社会のなかでの意義についてはほとんど検討されず、ヨーロッパ商人への影響という点でしか感知されていない。

とはいえ、これらはグローバルな連関に焦点をあてた本書には無い物ねだりだろう。むしろ、ローカルな歴史を対象とする研究者が本書のようなグローバル・ヒストリー研究の成果を学び、こうした研究者と連携して、グローバルとローカル双方の視点を踏まえた論点を深めることが求められている。評者には、このことが本書から強く感じられた。

服部志帆編。『霊長類学者 川村俊蔵のフィールドノート—1950年代屋久島の猟師と後継者たち』南方新社、2021年、389 p.

大坂桃子\*

フィールドワーカーが調査現場で得た情報を記録したものを、フィールドノートという。本書は、日本の霊長類学のパイオニアのひとりである川村俊蔵(1927–2003年)が、1952年と1953年にニホンザルの調査地と実験用サルの子供地開拓のために鹿児島県本土の南方に位置する屋久島を訪れた際のフィールドノート(以下、川村ノートとする)を読み解いたものである。のちに屋久島は、霊長類研究の世界的拠点となり、現在に

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科